

資料4

研究課題	4 LC/MS/MSを用いた動物用医薬品分析法の検討と応用 (22-24)
研究目的・背景	<p>本研究では、これまで確立した分析技術を生産段階への活用を図ることを目的として、民間機関と共同し乳房炎罹患牛における抗生物質残留性の検討を行った。また、近年輸入食品で基準違反や検出例の多い寄生虫駆虫剤や合成抗菌剤を追加した一斉分析法を開発することで、更なる監視体制の強化を図り、県民の食の安全・安心に資することを目的とした。</p>
研究結果	<p>乳房炎牛における抗生物質残留性の検討においては、民間機関と連携した共同研究により当センターではろ過膜一斉分析法を用いた抗生物質の測定を担当した。検討結果について学会等で発表し情報発信した。</p> <p>また、近年輸入食品で違反が報告されている寄生虫駆虫剤や合成抗菌剤を網羅した一斉分析法を新たに確立し、収去検査に導入するとともに、畜水産食品の汚染実態調査を実施することで監視体制の強化を図った。</p>
評価結果	<p>○総合評価 A(3人)・B(3人)・C(0人)・D(0人)</p> <p>○総合意見</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・抗生物質のスクリーニング一斉分析の手法開発は大いに評価できる。乳房炎牛におけるセファゾリン投与後の残留試験では、一般的に使用されているPD法にセファゾリン以外の生体由来の物質で陽性反応が出ることが明らかとなっており、よい成果が得られている。今後はPD法に代わる新たな方法の開発が必要と考えられ、今後の研究課題として検討されることを期待する。</li> <li>・社会的なニーズが高い研究分野であり、優れた研究成果を上げた研究として評価できる。</li> <li>・抗生物質の残留性検査における新たな知見と課題を明らかにするとともに、動物用医薬品に係る一斉分析法を開発し実態調査を行い安全食に関するデータを得たことにより目標を達成したと判断する。</li> <li>・食品中の残留薬品等の一斉分析法は効率的な分析に寄与しており高く評価される。</li> <li>・食品衛生法の一部改正に伴うポジティブリスト制導入への対応を企図して、一斉分析法の開発がH16年から3期9年にわたり展開され、所期の目的を達成したものである。であれば、「県民に食の安全安心を提供できる礎を築いた」と胸を張るレポートであってもよい。</li> <li>・重要な課題に取り組み、検査システムの向上を通じて社会に貢献する良い成果を挙げていると評価できる。</li> </ul>
センターの対応方針	<p>① 完了    2 継続延期    3 新規課題化</p> <p>動物用医薬品の一斉分析法の検討については、9年間にわたる研究の積み重ねにより検査の迅速化や検査項目の拡大等監視体制の強化を図ったものであり、これまで確立した分析法はスクリーニング試験法として、センターの検査体制の強化において一定の成果が得られたものと考えている。</p> <p>また、検討した前処理法の成果について、今後の分析法への対応や事件事故対応へ活用していく。</p>